



# 営農情報

## 「あまおう」7月の管理

第109号 令和3年7月12日

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 現在の生育状況

#### (1) 子苗の生育

- 令和2年11月前半及び12月・1月上旬の日最低気温が低かったことから(図1)、専用親株の休眠覚せい早く、ランナーの発生が例年より10日ほど早かった。
- 5月以降、降水量が多く(図2)、ランナーの発生が順調に続いたことから、6月上旬には十分な数の子苗が確保された。
- さしポットの鉢上げは、6月10日に概ね終了した。また、すけポットでは、子苗の切り離しが6月20日までに約6割終了し、6月末までに終了した。
- 鉢上げ時期が早く、朝夕の気温が低い時期に鉢上げされたため、子苗の活着は良好であった。

#### (2) 病害虫

- 近年の梅雨期の浸・冠水により専用親株が疫病菌に感染し、そのため子苗に疫病の発生が散見される。また、炭疽病の発生は少ない。
- 親株及び子苗にカキノヒメヨコバイが見られる。また、チビクロバネキノコバエの被害が散見される。

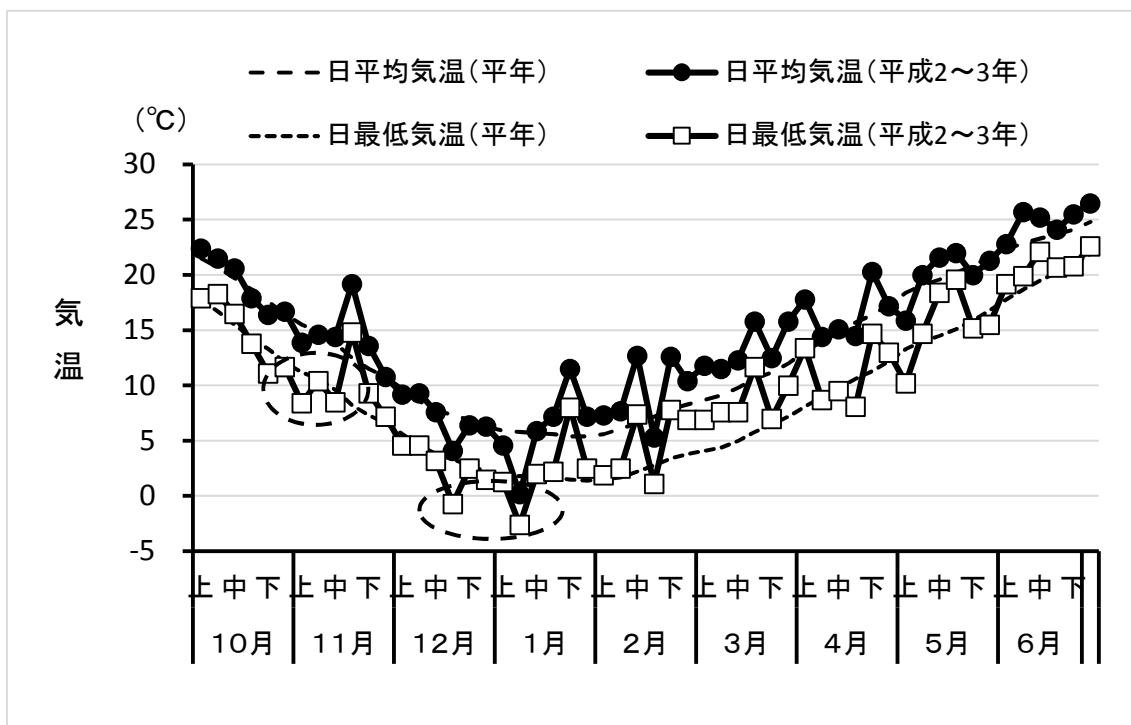


図1 令和2年10月～令和3年6月の気温推移(久留米市 アメダスデータ)

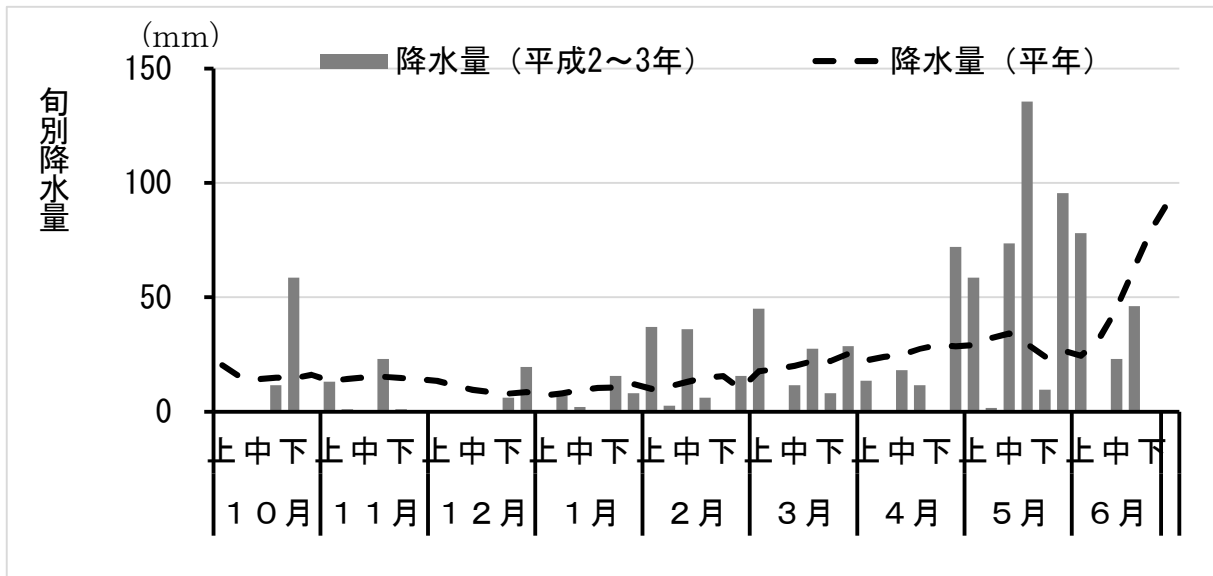


図2 令和2年10月~令和3年6月の旬別降水量の推移 (久留米市 アメダスデータ)

### 7月の管理目標

- 子苗が肥料切れしないように管理し、クラウン径 10~12mm の大苗を育成する
- 定期的な薬剤散布により、炭疽病や疫病の発生を防ぎ、健全苗を育成する
- 本田の土壌消毒や土づくりを行い、8月上旬までに定植床の準備を完了する

### 育苗管理

#### 【かん水】

- 少量多回数のかん水を心掛ける (晴天日は1日に3~4回程度)。
- 梅雨時期は根傷み (湿害) に注意し、培土の乾き具合を観察して時間やかん水量を調節する。

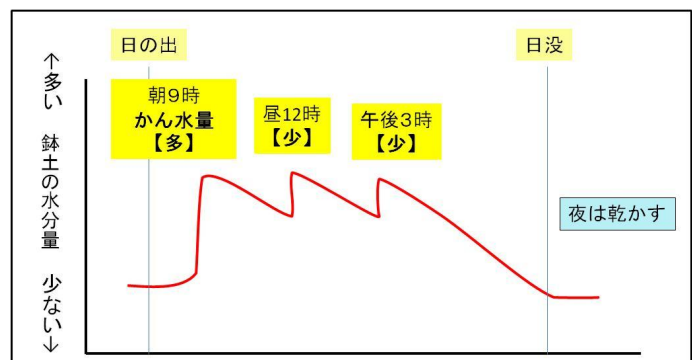


図3 かん水パターン事例(晴天日)

#### 【肥培管理】

- 肥料切れする期間がないように、置き肥と液肥を組み合わせる肥効を調節する。(表1, 表2)
- 活着後、2回程度液肥を施用する (例: OK-F-1 で1,000~1,200倍)。
- 炭そ病対策として、軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。

表1 「花むすめ」を利用した施肥事例

対象作型	施 肥		
	2回目 (7/上)	3回目 (7/下)	最終追肥 (液肥かん注)
株冷・夜冷 (8月に低温処理開始作型)	1~2粒	—	Ⅲ型：8月 5日 Ⅳ型：8月10日 Ⅴ型：8月15日
9月に低温処理開始作型及び 普通ポット	1粒	1粒	9月初

表2 「エコロング」を利用した施肥事例

作型	肥料の種類	施 肥 体 系 (置き肥)		追肥 (液肥)
株冷・夜冷 (8月に低温処理開始作型)	エコロング トータル 391-40 (40日タイプ)	エコロング 施用日	花むすめ(1粒) 施用日	肥料切れした場合の「OKF-1」 800~1,000倍でかん注 Ⅲ型 8月5日まで Ⅳ型 8月10日まで Ⅴ型 8月15日まで
		6月10日	7月20日頃	
		6月15日	7月25日頃	
		6月20日	7月30日頃	
9月に低温処理開始作型及び普通ポット	エコロング トータル 391-70 (70日タイプ)	エコロング 施用日	追 肥 (液肥)	
		6月20日	肥料切れした場合は「花むすめ」を追加、もしくは、「OKF-1」を800~1,000倍でかん注(9月上旬まで)	

○株冷作型では、「花むすめ」をエコロング施用40日後を目安に施用する。

### 【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後根が十分にまわってから開始する。
- 1回当たりの葉かぎ枚数は2枚以内とし、葉数は最初は徒長防止のため2.5~3枚に、それ以降は3~3.5枚を確保する。
- 葉かぎ作業直後は、「炭疽病」の予防散布を必ず行う(傷口からの感染防止)。
- 苗が徒長している場合には、葉かぎ後の葉数を2枚程度にする。

### 【 浸水・冠水対策 】

- 梅雨末期には局地的な集中豪雨により、浸水・冠水被害が発生しやすいので、動噴や炭酸ガス発生装置が水に沈まないように片付けておく。
- 地床育苗では、育苗床の周囲にあらかじめ、排水溝を設置しておく。
- 大雨が予想される場合は、事前に排水ポンプの準備などしておく。
- 苗が浸・冠水した場合には、次の対策をとる。
  - ・速やかに排水する。
  - ・茎葉に付着した泥が乾かないうちに、洗い流した後、殺菌剤を散布する。また、炭疽病や疫病の防除薬剤を散布する。
  - ・酸素発生剤や発根促進剤を施用する。

- 停電によりポンプが作動しない恐れもあるため、事前に水やエンジンポンプを用意しておく。

## 病虫害防除

- 薬剤散布は早朝、もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時やポット土が乾燥しているときには薬害が発生しやすい）。
- 病害は予防散布、害虫は初発での防除を心掛ける。

### 【炭疽病】

- 1週間間隔での定期的な予防散布及び降雨前後の防除及び葉かぎ後の薬剤散布により防除を徹底する。
- 常に育苗床をよく観察し、発病株と周辺の株は、ほ場外へ持ち出し処分する（発病株を中心に1m範囲）。葉かぎやまとまった降雨の後には必ず薬剤防除を行う。
- 台風前後には、必ず薬剤防除を行う。

### 【疫病】

- 疫病は、土壤伝染と水媒伝染し、発病株に形成された遊走子のうから放出される遊走子により伝染する。
- 梅雨時期～9月の高温多雨期に降雨やかん水により感染が広がる。定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除を徹底する（かん注剤の効果が高い）。
- 発病株と周辺の株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 土壤伝染性の病害であり、前年発病したほ場では、再発の恐れがあるので、必ず土壤消毒を行う。

### 【萎黄病】

- 育苗期によく観察し、発病株及び疑わしい株が見られた場合は、ほ場外に持ち出し、処分する。
- 前年に萎黄病が発生した本田は必ず土壤消毒を行う。
- 土壤消毒に当たっては次の点に注意する。
  - ・クロルピクリン（クロルピクリン錠剤）の効果は土壤水分に影響される。土壤水分が多いとガスが十分に土中に広がらない。適切な水分状態（地中4～5cmの土を軽く握って放すと2～3個に割れる程度）で処理する。
  - ・ハウスのサイド際や谷柱付近にも薬剤をきちんと処理し、被覆ビニルの端からガスが漏れないように念入りに押さえておく。
  - ・太陽熱消毒期間は長めに設定し、消毒期間中の日照時間が少なかった場合には、薬剤消毒と併用する。
- 育苗期に萎黄病が発生した場合は、親株を更新する。また、使用したポットや育苗トレー等は丁寧に水洗いした後ケミクロンGで消毒する。

### 【うどんこ病】

- 梅雨明けが遅い場合、育苗後期まで症状が進展しやすいので、しっかりと薬剤防除を行う。

## 【 ハダニ類 】

- 次ページトピックス「育苗期にハダニ類防除の徹底を」を参照してください。

※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に長期間影響する農薬の使用を避ける。

## 【 カキノヒメヨコバイ 】

- 上位1～2枚目の葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 発生を確認したら薬剤による防除を行う。



カキノヒメヨコバイ

## 【 チビクロバネキノコバエ 】

- 成虫は有機物に誘引されるため、ハウス周辺に長期間堆肥を堆積すると、本虫が誘引、産卵して増殖し、発生源となる。
- 堆肥を堆積する場合は、ビニルをベタ張りする等して、本虫が産卵できないようにする。
- チビクロバネキノコバエの成虫は育苗期前半（専用親株床）から発生が認められるため、育苗期から薬剤防除を実施する。

## 【 コガネムシ類幼虫 】

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンS Lゾル 500 倍液をポットにかん注する。

### <コガネムシ類幼虫の防除薬剤>

薬剤名	希釈倍数	使用方法	散布液量	使用時期	本剤の使用回数
ダイアジノンS Lゾル	500 倍	育苗ポットかん注	1000 L/10a	ポット育苗時	1 回

### 本田準備

- ハウス土壌は、雨に十分あてるとともに有機物を施用し、8月上旬には定植床の準備が終わるように、計画的な作業を心がける。

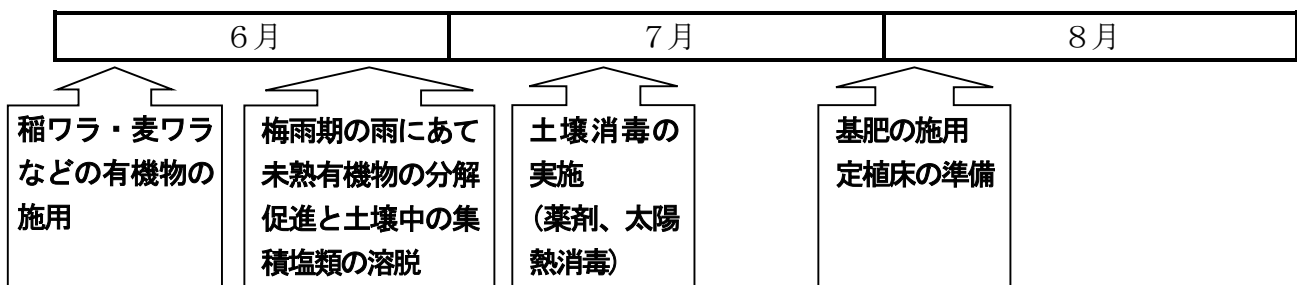


図4 土づくり・土壌消毒スケジュール

# トピックス 「育苗期のうちにハダニ類防除の徹底を！」

昨年度は、本田定植後、ビニル被覆以降にハダニ類が多発しました。ハダニ類のハウス内への侵入経路は、苗による持ち込みが主とされています。多発を防ぐには、育苗期及び本田初期での防除が重要です。

葉数が少なく、薬剤がかかりやすい育苗期は、防除の重要な時期です。下記の防除のポイントを参考にし、育苗期のうちにハダニ類防除を徹底し、本田に持ち込まないようにしましょう。

## ＜ハダニ類防除のポイント＞

- (1) 葉裏に十分な薬剤が付着するように散布する。
  - 葉裏に薬剤がかかるように丁寧に散布する。
  - ・ 散布する時に噴口を下から上に向け、葉裏に付着するようにして散布するとよい(表3)。

表3 散布方法と薬液付着度(奈良農試 H11年の試験結果を基に作表)

散布方法	薬液付着度*
散布時に噴口を下から上に向け、葉裏に薬液が付着するように散布	5.4 ± 2.6
散布時に噴口を横向き～下向きにして散布	3.3 ± 2.6

9月21日定植、11月2日に環状5頭口を用いて散布

\*薬液付着度 0～8の9段階で評価 数値が高いほど薬液が付着している

- 十分な量を散布する。(但し、農薬使用基準(散布液量)を遵守すること)

散布薬剤水量の目安 育苗期：60 ～ 100L/子苗 6000株 本田：250 ～ 300L/10a

- 葉裏まで薬剤がよくかかるノズルを使用する。

[噴口の違いによる薬剤付着試験(H28年11月 南筑後普及指導センター管内)の結果から]

- ・ イチゴセイバーノズルを使用するとすずらん噴口を使用した場合に比べて葉裏によく薬液が付着した。

- (2) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、作用機構の異なる薬剤をローテーション散布する。
  - 同じ薬剤及び同じ系統の薬剤はできるだけ長い間隔をあけて(育苗期では20日間以上)散布する。

本資料中の農薬については、令和3年7月1日現在の登録内容に基づいています。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！**

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！